

3. 東北学院の沿革

1. 東北学院は明治19年（1886）、日本人牧師押川方義、アメリカより派遣された宣教師W. E.ホーイの二人によって、キリスト教伝道者養成を目的として「仙台神学校」の名称をもって創設された。現在の仙台市木町通・北六番丁角の辺りの民家とその発祥の場所であった。翌明治20年（1887）、東二番丁と南町通角の本願寺別院跡を取得し、ここに移った。

創立者押川方義は嘉永2年（1850）、伊予松山藩に生まれたが、折から明治維新の改変に遭遇し、松山藩の命により抜擢されて東京遊学に上り開成校（東京帝大の前身）に入学した。やがて横浜においてアメリカ人宣教師S. R. ブラウンおよびJ. H. バラの影響のもとにキリスト教信仰に入り、新日本の建設はキリスト教によるほかないことを確信し、神学を修めて伝道者として献身するに至った。

数年間の新潟伝道を経て、明治13年（1880）には東北の中心地仙台に伝道の拠点に移した。当時、東北地方はキリスト教伝道にとっては未開拓地であったが、押川らの努力によって翌年には仙台教会（現仙台東一番丁教会の前身）が創立され、次第に東北、北海道各地に教勢を伸ばすことになった。しかし「日本の伝道は日本人伝道者の手によるべきである」との押川の信念にもかかわらず、牧師養成学校設立の祈りは容易に実現を見そうもなかった。

たまたま、明治18年（1885）12月、押川は来日したばかりのアメリカ合衆国改革派教会派遣宣教師W. E.ホーイと横浜において出会い、北日本の伝道の熱意において共通するものを感じ、肝胆相照らすところとなり、W. E.ホーイは直ちに仙台に着任して押川と協力を惜しまない約束を交わした。こうして、押川の祈りは聞き入れられることになり、二人は翌年明治19年（1886）春には仙台神学校を設立するに至ったのである。

教える者は初代院長の日本人牧師押川方義、米国から派遣されて来日したばかりの青年宣教師W. E.ホーイの兩名、集まった学生は6名であった。翌年明治20年（1887）には第二代院長として本学院の発展に大きく貢献することになるD. B.シュネーダーも加わる。

2. 明治24年（1891）、組織を拡大して、校名も「東北学院」と改称、伝道者志望の学生だけでなく、広く教育を求める青年学徒を受け入れ、一般普通教科をも授けることにした。また、仙台神学校として起工された校舎も、この年完成した。こうして、明治日本の教育制度に則った中等教育のための普通科、専門教育のための文科、師範科、商科等を設置、さらにその上に神学部を置いて、近代教育機関としての形態が定まった。

日本のキリスト教伝道は明治10年代の欧化主義の波に乗じて進展を見せたが、20年代に入ると反動的に日本の伝統のみを尊しとする狭い国家主義が勃興し、27、28年の日清戦争、37、38年の日露戦争の結果、外来宗教としてのキリスト教への批判が高まり、キリスト教を建学の精神とする諸学校は非常な窮地に陥った。本学院においても、生徒数は激減し、新設間もない理科専修科も廃止に至った。加えて、W. E.ホーイ副院長（明治33年）、押川院長（34年）は相次いで辞任し、それぞれの新しい任地へと向かうことになった。

このような内外の難関を乗り切ったのは明治34年（1901）に院長に就任したD. B.シュネーダーであった。明治・大正と日本政府の宗教政策も次第に変化し、国民の間で教育への要望も高まったため、D. B.シュネーダーは国内外の祈りに満ちた支えを基に、中学部、専門部の校舎、礼拝堂などの施設・設備の拡充に努力するとともに、キリスト教信仰に基盤を置く人格教育の徹底に献身、こうして東北学院は名実ともに関東以北の私学の雄としての地位を確立するに至った。本学院が押川、W. E.ホーイ、D. B.シュネーダーの3氏を東北学院の三校祖として敬愛するゆえんである。

3. 昭和11年（1936）5月、創立50周年を機に、D. B.シュネーダーは院長を辞任、出村悌三郎がその後を継いだ。昭和12年（1937）には、神学部は東京の日本神学校（現在の東京神学大学の前身）と合同し、廃止となる。この頃から全世界には第二次大戦へ向けての暗雲がたれこめ、極東においても満州事変〔昭和6年（1931）〕はやがて日支事変〔昭和12年（1937）〕を経て日中戦争へと拡大し、日本中が軍国主義、全体主義に変貌していった。このような状況はキリスト教学校にとって決して有利に働くわけもなく、東北学院もまた存立の危機にさらされることになる。昭和16年（1941）12月、日本は太平洋戦争に突入、経済的にも、創立以来本学院を支えてきたアメリカのミッショ

ン・ボードとの提携は途絶し、本学院は自立への苦しい模索を強いられる。また、文科系学校としての歩みも一層苦渋の度を加え、国策に沿う形で開設を余儀なくされた航空工業専門学校が本学院の存立を保ったのである。かくして、本学院は出村悌三郎院長、次いで出村剛院長のもとに、物心両面にわたる苦難に立ち向かわなくてはならなくなった。

4. 昭和20年（1945）、日本の敗戦によってキリスト教に立脚する本学院にもようやく復興の途が開け、アメリカの母教会との協力関係も回復し、本来のキリスト教に基づく教育が可能となり、英文及び経済両科の東北学院専門学校が設置された。ついで、数年後の昭和24年（1949）には、新たに制定された教育基本法、学校教育法に基づいて、新制大学に昇格、文経学部の中に英文、経済の両学科を設置、さらに勤労青年のための夜間の短期大学を併設、小田忠夫が学長に就任した。小田忠夫はA. E. アンケニー院長の急逝後、学長を兼務のまま院長となり、さらに後年理事長にも就任、昭和57年（1982）の死去にいたるまで30年以上にわたって東北学院の充実・発展に大きく貢献した。
5. 東北開発には工学的知識と技術が必要であるとの要望に基づき、昭和37年（1962）には、隣接の多賀城市に工学部として、機械工学、電気工学、応用物理の三学科を新設、引続いて土木工学科を昭和42年（1967）に増設した。工学部設置2年後の昭和39年（1964）、それまでの文経学部を、文学部一部、同二部、経済学部一部、同二部としてそれぞれの学部を独立させ、文学部一部の中に英文学科、基督教学科及び史学科を設置、経済学部一部の中に経済学科、商学科を設置した。さらにその上に大学院文学研究科と経済学研究科を開設し、より高度の知識をもって研究、教育に貢献する人材の養成を目指した。昭和40年（1965）には、法学部を新設、北日本唯一の私立大学法学部として好評を博した。また、工学部にも大学院工学研究科を設置、昭和50年（1975）には法学研究科が設置された。大学院研究科はいずれも今では博士課程前期・後期の両課程を備え、学部・大学院共に全国屈指の総合大学としての形を整えるに至った。この間、昭和44年（1969）より同49年（1974）までは月浦利雄が理事長に就任した。
6. 昭和57年（1982）、小田忠夫の後を継いで児玉省三が理事長に、情野鉄雄が院長・学長に就任、やがて昭和61年（1986）には創立100周年を迎え、その記念事業の一環として、校地が狭隘のため土樋キャンパスに加えて、仙台市の北郊の泉地区に広大な敷地を持つ壮麗な新しい校地、泉キャンパスを完成、平成元年（1989）には同キャンパスに新しい理念に基づく教養学部教養学科が新設された。教養学科の中に人間科学・言語科学・情報科学の三専攻を持つ新学部は、時代の要請に応える広い教養を備えた人材の育成を目標とし、平成6年（1994）からはさらに大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を、次いで平成8年（1996）には同博士課程を設置した。また平成9年（1997）からは大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻、アジア文化史専攻に修士課程を設置し、次いで平成11年（1999）には同博士課程を設置、より高度な教養教育が可能となった。この間、平成4年（1992）に、情野鉄雄が院長・学長に併せて理事長に就任した。平成7年（1995）には、情野鉄雄理事長のもと田口誠一が院長に、倉松功が学長に就任した。平成11年（1999）、田口誠一が院長に併せて理事長に就任、この年大学設置50周年を迎えた。
7. 平成12年（2000）、社会人学生の勤労形態の多様化や生涯学習の更なるニーズに応えるための多様な学習機会の提供を目的として二部を発展的に解消し、文学部英文学科と経済学部経済学科及び商学科において昼夜開講制を導入し、柔軟な履修形態のもとで開かれた大学としての機能を発揮した。また、21世紀を目前にしたこの年、新たな学生のサービスを含む教育環境整備の充実に取り組み、土樋キャンパスに教育管理棟及び新体育館を完成させた。

平成13年（2001）、社会的認知度の充実と教育課程の構成変更に伴い文学部基督教学科を文学部キリスト教学科に、経済学部商学科を経済学部経営学科に、さらに教養学部教養学科の言語科学専攻を言語文化専攻へとそれぞれ名称変更を行った。

平成14年（2002）には、工学部の機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科と時代に即した名称に変更し、各学科のより具体的な内容を反映させることになった。

大学院においては、これまで経済学専攻のみで構成されてきた経済学研究科に、近年の商学（商学・経営学・会計学）系科目の充実を背景に、地域社会・経済の発展をリードできる高度な専門知識を有する職業人の養成を目指し、新たに経営学専攻を設置した。

平成15年（2003）、田口誠一理事長・院長の退任に伴い、赤澤昭三常任理事が理事長に就任、倉松功学長が院長

を兼務した。

平成16年(2004)より星宮望が学長に就任、この年、専門職学位課程を置く法科大学院(ロースクール)を新設した。

平成17年(2005)4月より、文学部の史学科を改組し、歴史学科を設置、教養学部教養学科を改組し、新たに人間科学科、言語文化学科、情報科学科及び地域構想学科の4学科を設置した。

平成18年(2006)4月より、工学部は21世紀の人類社会から求められる人材育成と技術革新の変化に対応できる教育・研究を行う機関となることを目的とし、機械創成工学科、物理情報工学科、環境土木工学科をそれぞれ改組して、機械知能工学科、電子工学科、環境建設工学科を設置した。また、工学教育の基礎学習の強化充実を目的とした工学基礎教育センターを設置した。

平成19年(2007)3月に、工学部に東北私学初の包括的ナノテク研究拠点となるハイテク・リサーチ・センターを設置した。また、4月より星宮望学長が院長を兼務した。

平成20年(2008)6月、赤澤昭三理事長の退任に伴い、平河内健治常任理事が理事長に就任した。

平成21年(2009)4月、経済学部は社会における教育ニーズの変化と期待により適切に対応するため、学部を改組した。経済学部経営学科を独立させて経営学部経営学科を新設し、経済学部は経済・経営両学科夜間主コースの募集を停止するとともに、新たに共生社会経済学科を設置して2学科制とした。また、同時に大学院経済学研究科経営学専攻を独立させ、新たに経営学研究科経営学専攻を設置した。11月には学芸員の養成、本学の研究成果・知的財産を公開展示することを主たる目的とした東北学院大学博物館を開館した。

平成22年(2010)3月に、工学部にバイオテクノロジーを環境浄化や障害者の介助などに生かす新技術の研究拠点となるバイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟が完成した。また、同年4月、大学院工学研究科応用物理学専攻博士前期課程を募集停止し、新たに電子工学専攻修士課程を設置した。また、同じく、大学院工学研究科土木工学専攻を環境建設工学専攻に名称変更を行った。

平成23年(2011)4月、文学部は東北学院創立125周年の記念すべき年に、より新しい内容の文学部を目指して、キリスト教学科を改組し総合人文学科を設置した。

平成24年(2012)4月、大学院工学研究科応用物理学専攻博士後期課程を募集停止し、新たに電子工学専攻博士課程を設置した。

平成25年(2013)4月より松本宣郎が学長に就任した。

平成26年(2014)4月、平河内健治理事長の退任に伴い、松本宣郎が学長に併せて理事長に就任した。また、同年4月、大学院法務研究科法実務専攻の学生募集を停止した。

平成26年(2014)6月学校教育法が改正施行されたことに伴い、大学が学長のリーダーシップで戦略的に大学を運営できるガバナンス体制の構築を目指し、学則その他多くの大学諸規程の改正及び関係組織の改変が行なわれた。

平成27年(2015)4月星宮望院長の退任に伴い、佐々木哲夫が院長に就任した。また、7月には、学校法人東北学院中長期掲額TGグランドビジョン150が策定、承認され、戦略的な事業計画を進めることとした。

平成29年(2017)4月より、工学部を改組し、電子工学科の募集停止及び電気情報工学科の電気電子工学科への名称変更を行い、情報基盤工学科を新設した。

8. 他方、東北学院中学校・高等学校並びに榴ヶ岡高等学校については、明治28年(1895)、本学院学制改革の折に中等教育5年制普通科として発足し、校舎施設を市の中央、東二番丁に定めた。大正4年(1915)にはこれを中学位と改称し、戦後昭和22年(1947)には新制中学校として、その翌年には新制高等学校として新しく発足した。昭和34年(1959)には高等学校の中に榴ヶ岡校舎を並設し、校舎を市の東部榴ヶ岡の地に定めた。榴ヶ岡校舎は昭和47年(1972)に榴ヶ岡高等学校として独立し、泉キャンパスの一角に移転し校舎設備を完成させた。これら両高等学校は年々発展を遂げ、大学と一貫教育の実を挙げ、キリスト教に基づく人格教育に資するとともに、理学・医学・歯学・農学・工学系など多方面に人材を送り出して本学院の名を高らしめてきた。この間特に、昭和21年(1946)から同46年(1971)の間、新制中学校・高等学校の校長であった月浦利雄の功績は記憶に新しい。

平成17年(2005)4月より、東北学院中学校・高等学校は、約一世紀の歴史を積み重ねてきた東二番丁の校地・校舎から宮城野区小鶴に移転、新しい歴史のスタートを切った。

一方、榴ヶ岡高等学校は、平成20年（2008）9月、昭和47年（1972）榴ヶ岡高等学校として独立した時代に建設した体育館を解体し念願の新体育館を完成させた。平成21年（2009）榴ヶ岡高等学校は創立50周年を迎え、シンボルマークを作成し記念式典にて披露した。

最後に東北学院幼稚園については、本学院工学部の設立と時を同じくして昭和37年（1962）、多賀城キャンパスの一角に創設され今日に及んでいる。「若き日に主を覚えよ」との教えのとおり地域に密着し、幼児期の霊の教育に大きな貢献をしている。

9. 平成23年（2011）3月11日の東日本大震災は、東北地方に未曾有の大被害をもたらしたが、東北学院も幼稚園、中学校・高等学校、榴ヶ岡高等学校、大学の校舎その他の施設に多大な被害を受けた。

同年5月に、東北学院は創立125周年を迎え、創立記念式当日には感謝祈祷会を執り行い、震災の犠牲となった本学院の学生・生徒をはじめとする多くの尊い命に黙祷を捧げ、教職員一人ひとりが復興への想いを強く持つ機会となった。

同年9月、「学び」と「つながり」の拠点として、仙台市青葉区一番町に「東北学院サテライトステーション」を設置した。

平成24年（2012）9月に、土樋キャンパス西端に建つ旧宣教師住宅であるデフォレスト館（旧シップル館）が、国の登録有形文化財として登録された。

10. 平成28年（2016）3月28日、大学土樋キャンパス北地区に建設の「ホーイ記念館」（仙台市青葉区片平2丁目1番地の11）の献堂式が行われ、9月からラーニング・コモンズや教室等の使用を開始した。

平成28年（2016）5月15日、東北学院創立130周年を迎え、創立記念式とともに130周年記念事業等を執り行った。

平成28年（2016）7月25日に、「東北学院旧宣教師館」（デフォレスト館）が、国の重要文化財指定となる。

11. 本学院は、創立の当初から、日本とアメリカ両国の信仰者たちの献金と献身の所産としてその生を受け、その意味で真の国際的存在であったが、戦後の国際化の流れに遅れることなく、同じ在米母教会に連なる姉妹校大学との間で学生・教授の相互交換を活発に行い、また、合衆国合同教会の派遣する宣教師や有能な外国人教師の存在と教育的努力とによって、広く新知識を導入し、さらにはヨーロッパ各地の大学とも留学生交換を行うなど、世界市民たる意識を養い、国際的視野の拡大にも大いに貢献している。今後さらに、広くアジア地域からの留学生を多数迎えて、各国の発展に協力する要務はますます大きくなっている。